

北インドにおける肉食の慣習に関する人類学的研究

1. はじめに

シャーカ-ハーリー (菜食主義者) 乳製品全般は食す。

マンサー-ハーリー (非菜食主義者) 調査地で一般的に流通しているのは鶏、山羊、魚、卵。

菜食は浄と、肉食は不浄と結びつき、ブラフマンと不可触民をその対極とするカーストヒエラルキーの中で、カースト間の上下関係を認定する一つの指標として利用されている面がある。そこでは、神々も菜食と肉食にわけられ、階層の中におかれている。

紀元前後以来の「伝統」。ブラフマン中心モデルにおける、模倣される習慣。(ルイ・デュモン 2001 『ホモ・ヒエラルキクス』)

現代の北インドのヒンドゥーの肉食の微細な状況と、新しい社会性。

2. 調査地

ヒンドゥー80.5%、ムスリム13.4% (2001年国勢調査)

北インドは、南インドと比べて比較的、マンサー-ハーリーが多いと言われている。

表. インドの食肉生産量

	食肉生産量	家禽肉	羊・山羊肉	水牛肉	牛肉	豚肉
量(千トン)	2,572	849	751	376	213	204
割合(%)		33	29.2	14.6	8.3	7.9

資料: ALCI、インドの畜産業の概況

3. 肉食にふさわしい時と場と状況

肉食をする者にとって、

肉食を避ける日 火曜日、土曜日、ほとんどの儀礼の期間

肉食を好む日 水曜日、日曜日、ホーリー祭

肉食を避ける場所 家の中、台所、高カーストの家、神像の置いてある部屋

肉食をする場所 家の外、ジャングル(森、畑)、レストラン、外国

売り買いの場所、調理用具の区別(2つ目のガス台、土を掘ったかまど)、後始末。徹底した分離。

図. インド州地図



資料: インドing、インド州地図

4. 牛肉と豚肉

牛、水牛肉 バラーマンス (大きい肉)

- ・ブラフマンの実業家が、何度も日本に来て、長いこと滞在していた。肉でも何でも食べていたが、牛肉だけはどうしても食べられなかった。かなり経った後、初めて牛肉を口に入れてみたが、ものすごい気持ち悪さを感じた。もう二度と食べないと言う。
- ・ムスリムの結婚式に発表者が参加するとなった時、発表者が牛肉や水牛肉を食べても良いかという、家族会議。

結局、食べてはいけないという事に。

ムスリムの間では食べられている。ただし、調査地の村では、近くの町で解体されたものを、ムスリムの家庭に直接配る。

豚肉

調査地で豚は、ゴミ捨て場、ドブ川などにたむろし、乳房をたらして何匹もの子豚を引き連れる、「汚い」動物である。誰からも好かれず、避けられ、ムスリムはもちろんヒンドゥーも、その肉を食べると想像しただけで吐きそうな顔をする。

しかしごく少数の人々は、森に住み木の実だけを食べる豚の肉の美味しさを知っている。

どちらも食すのを避けられるが、その動機と方法は異なる。

5. 一目瞭然の食材

一種類の材料のみで作る料理 材料は一目瞭然

目に見える物そのもの（肉片）だけが、常識の中では忌避する対象だった。

ケーキ、アイスクリームの問題。

6. 「気持ち悪い」肉食

シャーカーハリーにとって、

・口や鼻を押さえて、調理の場から逃げ出す。 ・キスをすることを拒否する。 ・我を忘れるような怒りを覚える。

マンサーハリーにとっても、

・毎日続けては食べたくない。 ・毎日見すぎると食べたくなくなる。

マンサーハリーにとって、肉を食べるとは、どういうことなのか？

7. 人生における変遷

肉食をやめる例

・師に諭されて。 ・「悪習慣」を捨てることを条件に請願をたてる。 ・環境が変わったことを機に（家の新築、夫の死等）。

菜食主義をやめる例

- ・幼い頃に、近所の人に教わって食べた。父の代までは誰も食わず、息子たちは全員食べる。（ブラフマンの男性）
- ・死期が間近になり、肉が美味しくて活力がつくことを思い出し、再び食べた。（低カーストの女性）
- ・外国へ行き、生まれて初めて口にした。最初は気持ちが悪く、吐きそうになったが、しばらくしてとても美味しく感じるようになり、大好きになった。帰国後も食べている。（ブラフマンの男性）

8. 悪徳と高価な秘密

肉 酒 煙草 大麻

「捨てるべき習慣」として、考えられているもの。調査地では、それぞれ相互の関係が連想される。

さらに、多くのヒンドゥーが敵対心や差別感情を持つ中国人やネパール人、ムスリム、そして憧れと嫉妬心を抱く先進国の人々など、外国人の慣習とも結びつけて語られる。

秘密の仲間意識を持つことも。友人とともに、特別な場所で、「楽しみを知らない人」を哀れみながら。

生鶏1kgで 約Rs.100から120。 山羊内臓入り500gで 約Rs.110。

一般的に、日収の3分の1から2分の1程度。非菜食主義者同士で、奢れと言い合い、奢り合う。

やっぱり美味しい。活力がつく。栄養のために良い。

9. 二種類の知識

『ギャーン ガンガ（知識の本）』

「20年生」の、経済大国から来た、発表者の知識

知識と知識、経済力と欲求、罪悪感と美味しさの、矛盾と葛藤。

科学的知識、経済発展、自由な生き方と関係するモデルの指標としての、新たな肉食の様態。

実践における場の分離と、対象の優先によって可能。